てきすとぽい杯

VOL 7

http://text-poi.net/

目次

てきすとぽい杯について

てきすとぽい杯について

第７回 募集要項

第７回 審査結果

入賞作品紹介

《大賞》

〈前人未踏の大作で賞〉

「不戦勝」　晴海まどか　　獲得☆ 4.286

《入賞》

「袋と恋と拳銃について」　太友　豪　　獲得☆ 4.154

「ヤスマイルの物語」　長介　　獲得☆ 4.077

「いいなずけたち」　豆ヒヨコ　　獲得☆ 3.769

〈候補作品〉　※得票順

「足音の存在証明」　茶屋　　獲得☆ 3.750

「ヨダレと投票券」　雨森　　獲得☆ 3.667

「酒が不味い」　碧　　獲得☆ 3.583

「宇宙的恐怖を克服するために」　工藤伸一@ワサラー団　　獲得☆ 3.538

「おやつ考」　住谷　ねこ　　獲得☆ 3.538

〈KDP 風立ちぬ杯賞〉

「きよき鉄槌を振る者は」　犬子蓮木　　獲得☆ 3.364

「モググは無慈悲な星の覇王」　丁史ウイナ　　獲得☆ 3.333

「小説はひとつの鏡である」　Wheelie　　獲得☆ 3.083

〈最速記録再び更新で賞〉

「明日は早いからこれ書いたらもう寝ます。」　ひやとい　　獲得☆ 2.714

〈同じお題を用いた作品〉

同じお題を用いた小説、Twitter 小説のご紹介

終わりに

終わりに

てきすとぽい広告

奥付

「てきすとぽい」とは

URL　：　http://text-poi.net/
Twitter　：　http://twitter.com/textpoi

てきすとぽいは、2012 年 2 月より製作中の、競作・共作サイトです。
無計画書房に集う WEB 作家の有志で開発を進めております。
先日ようやく、投稿・投票・感想・チャットなど最低限の機能が稼働いたしまして、2013 年 1 月より　てきすとぽい主催の競作イベント「てきすとぽい杯」を開始いたしました。

「てきすとぽい杯」とは

神様は七日間で世界を創造した。
僕らは一時間で物語を想造する。

てきすとぽい杯は、制限時間 1 時間＋推敲 15 分で、お題に沿った小説を競作するイベントです。
競作で作品が集まった後は、☆投票による審査、感想コメント、チャット会での意見交換や交流がセットになった、全体としては約一週間ほどのイベントになります。

第 7 回てきすとぽい杯

会　　場　：　http://text-poi.net/vote/26/
お　　題　：　「____党に清き一票を」
空欄に言葉を入れ、作品中で使用してください。
投稿期間　：　2013 年 7 月 20 日 22:30　～　同日 23:45
審査期間　：　2013 年 7 月 21 日 0:00　～　2013 年 7 月 28 日 24:00

第 7 回には、初参加の作家さんお一人を含む、計 13 作品をお寄せいただきました。

第７回募集要項

【投稿について】

投稿期間：

7 月 20 日（土）22:30　～　同日 23:45

制限時間 1 時間の間に、お題に沿った小説を書いて投稿してください。
お題は、開始時間になりましたら、会場やてきすとぽい Twitter にて発表いたします。
会場　：　http://text-poi.net/vote/26/
てきすとぽい Twitter　：　http://twitter.com/textpoi

お題発表より 1 時間で執筆、その後 15 分で推敲＆投稿してください。
締切は同日 23:45 頃になる予定です（お題発表時刻により、若干前後します）。

【審査について】

審査期間：

7 月 21 日（日）0 時　～　7 月 28 日（日）24 時

審査方法は☆５段階評価で、てきすとぽいのアカウントをお持ちの方ならどなたでも投票できます。
個々の作品に感想ページもございますので、作品を読んで感じたこと、☆投票では表現しきれない評価など、ありましたらなんでも、お気軽にご記入ください。

票の集計方法：

☆評価の平均で、最も多くの☆を獲得した作品を「大賞」、以降３作品前後を「入賞」といたします。

※時間外に投稿された作品、お題を満たしていない作品も、投票や感想は同じように行えます。
　ただ、結果発表の際に、集計対象からは外させていただくことをご了承ください。

【審査結果】　※得票順、敬称略

１位　☆ 4.286
「不戦勝」　晴海まどか

http://text-poi.net/vote/26/12/
投稿時刻: 2013.07.20 23:44
総文字数：3711 字

２位　☆ 4.154
「袋と恋と拳銃について」　太友　豪

http://text-poi.net/vote/26/7/
投稿時刻: 2013.07.20 23:30
総文字数：1670 字

３位　☆ 4.077
「ヤスマイルの物語」　長介

http://text-poi.net/vote/26/3/
投稿時刻: 2013.07.20 23:23
総文字数：1728 字

４位　☆ 3.769
「いいなずけたち」　豆ヒヨコ

http://text-poi.net/vote/26/11/
投稿時刻: 2013.07.20 23:43
総文字数：1763 字

５位　☆ 3.750
「足音の存在証明」　茶屋

http://text-poi.net/vote/26/2/
投稿時刻: 2013.07.20 23:15
総文字数：1772 字

６位　☆ 3.667
「ヨダレと投票券」　雨森

http://text-poi.net/vote/26/4/
投稿時刻: 2013.07.20 23:23　最終更新: 2013.07.20 23:36
総文字数：1351 字

７位　☆ 3.583
「酒が不味い」　碧

http://text-poi.net/vote/26/10/
投稿時刻: 2013.07.20 23:39　最終更新: 2013.07.20 23:43
総文字数：1743 字

８位　☆ 3.538
「宇宙的恐怖を克服するために」　工藤伸一@ワサラー団

http://text-poi.net/vote/26/13/
投稿時刻: 2013.07.20 23:45
総文字数：1169 字

９位　☆ 3.538
「おやつ考」　住谷　ねこ

http://text-poi.net/vote/26/5/
投稿時刻: 2013.07.20 23:26
総文字数：1691 字

10 位　☆ 3.364
「きよき鉄槌を振る者は」　犬子蓮木

http://text-poi.net/vote/26/6/
投稿時刻: 2013.07.20 23:30
総文字数：3081 字

11 位　☆ 3.333
「モググは無慈悲な星の覇王」　丁史ウイナ

http://text-poi.net/vote/26/8/
投稿時刻: 2013.07.20 23:33
総文字数：1397 字

12 位　☆ 3.083
「小説はひとつの鏡である」　Wheelie

http://text-poi.net/vote/26/9/

投稿時刻: 2013.07.20 23:39

総文字数：885 字

13 位　☆ 2.714
「明日は早いからこれ書いたらもう寝ます。」　ひやとい

http://text-poi.net/vote/26/1/

投稿時刻: 2013.07.20 22:35

総文字数：84 字

※ 獲得☆票の内訳につきましては、てきすとぽい杯の会場にてご確認ください。

会場　：　http://text-poi.net/vote/26/

《大賞１作品》

獲得☆ 4.286

「不戦勝」

著：晴海まどか

http://text-poi.net/vote/26/12/

軽音サークルの、次期役員を決めるミーティングに参加した有賀。
堅物カップルの南田と大橋が、当然、会長・副会長を務めるものと思っていたら、
次の会長はお前に決まったと言われ……。
映像的かつ音楽的な演出で、大学生たちの単純には線引きできない関係と感情とを描いた
僅か一時間で 3,700 字を超える大作が、大賞に輝きました。おめでとうございます！

《入賞３作品》

獲得☆ 4.154

「袋と恋と拳銃について」

著：太友　豪

http://text-poi.net/vote/26/7/

「ヴィセラバッグシリーズ」という名の商品として生まれ、
例外的に僅かな知能を持ってしまったがために、闇市場に放出されたユンナ。
その人生の特殊さ、壮絶さと、人類のためとして実現される技術の裏側の世界が、読者を圧倒しました。

獲得☆ 4.077

「ヤスマイルの物語」

著：長介

http://text-poi.net/vote/26/3/

遠き国ヤスマイル。かつて、岩塩の精製によって栄えたこの国で、
塩を絶対視し、塩に帰るべきとする党と、貨幣を導入すべきとする党が争った。その結末は……？
二大政党と国民投票の古い歴史を辿る、摩訶不思議な物語が、高い評価を獲得しました。

獲得☆ 3.769

「いいなずけたち」

著：豆ヒヨコ

http://text-poi.net/vote/26/11/

リエとケントは、同じ学校で、同じマンションで、同じピアノ教室に通う仲。
大らかで奔放な少女リエと、その彼女が気になって仕方ない少年ケントとの、
微笑ましくも複雑な関係性を描いた、読者を惹きつける恋愛掌編です。

《特別賞》

《最速記録再び更新で賞》

「明日は早いからこれ書いたらもう寝ます。」

著：ひやとい

http://text-poi.net/vote/26/1/

なんと今回は、お題発表からわずか５分。記録保持者のひやといさんが、またも最速記録を更新です。

《前人未踏の大作で賞》

「不戦勝」

著：晴海まどか

http://text-poi.net/vote/26/12/

これまでの最多字数（二千字台後半）を大きく上回る、3,711 文字でのエントリーでした。
この作品は、第７回大賞とのダブル受賞となります！

《KDP 風立ちぬ杯賞》

「きよき鉄槌を振る者は」

著：犬子蓮木

http://text-poi.net/vote/26/6/

KDP 風立ちぬ杯（http://kindou.info/16937.html）にエントリーされた Kindle 本の、番外編的作品。
同時期に開催の２イベントを両方盛り上げて楽しんでしまおうという、非常に意欲的な作品でした。

――受賞された皆さま、おめでとうございます！
素晴らしい作品をありがとうございました。

（次のページから、作品が始まります。）

投稿時刻　：　2013.07.20 23:44
総文字数　：　3711 字
獲得☆ 4.286

《大賞受賞作品》

《特別賞・前人未踏の大作で賞》

不戦勝

晴海まどか

　目が覚めた。胃が重たくて、喉がひどく渇いていた。
　二日酔いだ、と自分の体の状態を判断し、腕をもっそりと伸ばした。目覚まし時計は、午前八時半を指している。
　一人暮らしのワンルームマンションの一室。カーテンの隙間から洩れ入る光で、部屋の様子は一望できた。俺は長袖のシャツにジーパン姿のまま、ベッドに横たわっていて、ベッドの下にはジャケットやトートバッグが放り出され、脱いだ靴下が左右ばらばらに丸まって部屋のすみに転がっていた。
　昨晩、どうやって部屋まで辿り着いたのか覚えていない。
　目覚まし時計のすぐ横に転がっていた iPhone に触れた。今日の予定……所属している軽音サークルの話し合い。
　めんどくせー。口の中で呟いて、だが体を起こした。さすがにサボったら、色んな奴に怒られそうな気がする。今日はそういう話し合いの日だ。
　ベッドから降りて冷蔵庫にあった水のペットボトルにそのまま口をつけて一気に飲んだ。冷たい軌跡が体に刻まれ、目が覚める。胃はまだ重いが、のろのろとシャワーを浴び、何も食べずに部屋を出た。
　大学までは徒歩五分。近い。サークル棟の地下にある部室を覗くと、メンバーは半数以上が揃っていた。集まっているメンバーは全員、俺と同じ二年生で、あと一ヶ月で三年生になる。今日は、二年生の会員十五人で集まって、次期会長を始めとした役員を決める日なのである。
「お前、よく来られたなー」
　Fender の青いエレキベースを抱えて俺に声をかけたのは、俺と同じ経済学部でもある大橋だ。
「潰れて起きられないんじゃないかと思ってたわ」
「そうなってたら、お前、むちゃくちゃ怒るじゃねーか」
　ははっと笑う大橋は、気さくではあるが根はものすごくまじめだ。そして、大橋の彼女、南田もまたしかり。ギター担当の南田とベース担当の大橋は、うちのサークルの名物カタブツカップルだった。
　午前十時になり、定時になった。揃ったメンバーは十四人。まさかの南田の姿がなかった。あぁ、あいつは。大橋が口を開いた。
「今日は急用だって。昨日の結果で問題ないから、話進めといてくれって」
　メンバーの間に瞬時に動揺が走ったのがわかった。が、俺は事態がいまいち飲み込めていなかった。
「昨日の結果って？」
　俺の質問に、さして広くはない部室がしんとなった。
「……ま、ある程度予想はしてたけど」
　大橋がそう前置きをして、続けた。

「お前が次の会長な、有賀」
　ちなみに、『有賀』というのは俺の名前である。

　話し合い、という名目で集まったはずだったのに、結論はほぼ決まっていた。俺が会長で、副会長は大橋で。おかしいだろ！　と俺は今までのないくらいのテンションで突っ込んだのだが、まぁまぁまぁ、なんて大橋はにこやかに笑んだだけだった。
　話し合いはもはや話し合いではなかった。抵抗する俺とそれをいなす大橋の掛け合いであっという間に一時間が過ぎてしまい、ここらで休憩でもするか、ということになった。
　俺は部室を飛び出し、すぐさま電話をかけた。相手はもちろん南田である。
　もしもし？　電話口の南田の声は明るい。
「お前、なんで今日来ないんだよ！　っていうか、なんで俺が会長なんだよ！」
　南田はしばしの沈黙のあと、答えた。
「どこかでお茶でもする？」

　俺はそのまま話し合いをとんずらし、大学を出て南田に指定されたファストフード店に向かった。電車で一駅先。
　窓ガラス越しに、南田はにこやかに俺に手を振った。ジュースのストローをくわえ、カウンター席を陣取っている。ファストフード店に入った瞬間、油の匂いで二日酔いの胃がもだえそうになるのを堪え、注文もせずに俺は南田の隣のスツールに腰掛けた。
「どういうことだよ」
「有賀くん、昨日の記憶、ほんとにないの？」
　言われて、考え込む。重たい胃がピクリと動いた。
　昨晩は、サークルの同学年のメンバーで飲み屋にいた。サークルの次期役員を決める前に、ざっくばらんにみんなで飲もうぜ、と言いだしたのは大橋だったか。ともかく、まぁそういうことで飲み会だったわけである。
　軽音サークルというと、その名のとおり軽そうなサークルに思われがちだが、うちのサークルに限って言えば半分はそうでなかった。半分、というのは名物カタブツカップル、南田と大橋の二人を中心とする練習熱心なグループのことを指す。残りの半分は、俺を筆頭とする、楽器とかやってれば女の子にモテたりするんじゃね？　という軽いノリのグループを指す。
　とまぁ、そんなわけだから、次期会長は南田か大橋がなるのが妥当だというのが当然の流れだった。大橋は表に立つタイプではなく、裏でメンバーのサポートに徹するのが常だったので、そうすると自然に次期会長は南田で、となるはずだった。
　だから、まぁざっくばらんに話そうぜという会だったわけだけど、俺はビールのジョッキを傾けることに注力していたわけだ。ぐびぐびぐびっと飲んで、もう一杯！　なんてのを繰り返していたら、少し経ってから南田にジョッキを持つ手を止められた。
　――有賀くんも次期役員のこと話しようよ。
　南田の細くて白い手を見た。ギターの練習のしすぎでかたくなった指先。ふわっとしたブラウスの腕、細い首、目は大きいのに小さな顔。生真面目すぎなければ、もっと大々的にモテるだろうにと思わずにはいられない。まぁでも、大橋っていうカタブツで顔もそこまで悪くはない彼氏がいるしいいのか。こいつらどこまで進んでるのかな、なんて下品な俺は考える。
　――別にいいじゃん、どうせ南田が会長になるんだから。
　――そういう問題じゃないでしょ。ちゃんと話合わないと――
　――じゃ、俺が会長でもいいわけ？
　――その気があるなら、別に私はそれでもいいと思うよ。
　俺は立ち上がった。そのときには、はっきりいってかなりでき上っていた。
　――今回の選挙では、この有賀に！　有賀党に清き一票を！　あ、有賀党でありがとうだ！　なんちゃって！　カハハハ！
「……でも、だからってそれで本当に俺がやるわけないだろ！」
「そうかな？　みんなも面白がってたし、それはそれで面白いんじゃないって話にもなってたし、じゃあ有賀くんにやらせてみるかって話になったんだけど」

　南田はそう笑んだ。そこで、気づいた。いつもの毅然ときりっとした雰囲気の南田らしくない、なんだか疲れたような顔。
「……何かあったのか？　だって、おかしいだろ。南田だって、会長やりたかったんじゃ――」
「実は、ちょっと前に別れたんだよね、大橋くんと」
　絶句。
「……みんな、知ってるの、それ」
「一部の人は。だから、みんな有賀くんが会長やるって言って反対しなかったんだよ」
「でも……なんで？　お前ら、うまくいってたんじゃないの？」
「面白くないって言われた」
　失礼しちゃうよね、自分だって面白いわけじゃないのに。そう南田は笑って、ストローを再びくわえる。手にしていたカップの残りをずずずっとすすった。

　ファストフード店を一人で出て、大学に戻る気にもならず、自宅マンションに戻った。寂しそうに笑んだ南田の顔が頭から離れなかった。
　生真面目で、近寄りがたくて、面白みがなくて損してる女、南田。
　そんな彼女も、なんだかんだで普通の女子なんだと知った思いだった。

　南田はそれから一週間、サークルに顔を出さなかった。大橋に気を遣ってか、誰もそのことに触れない。それがまたもどかしい。あんなに一生懸命練習してきた南田なのに。
　南田の顔が脳裏から離れなかった俺は、その日、とうとう南田を大学から二駅離れたところにある練習スタジオに呼び出した。
「どしたの？」
　なんて言いつつ、南田は来てくれた。表情は、一見すると明るかった。
「セッションしよう」
　セッション？　南田は少し困惑したように俺を見返す。
「ギターないよ」
「スタジオでレンタルできるだろ。金は俺が払う」
「まぁ、いいけど……有賀くんって、セッションなんてできるの？」
　セッションというのは、テンポとコード進行だけ決めて、アドリブで楽器を奏でることをいう。適当にしかギターの練習をしてこなかった俺としては、はっきりいって大の苦手でもあった。が。
「やる！」
　二人でスタジオに入り、六畳ほどの小さな防音室でギターのセッティングをした。俺がテンポを決め、南田がコード進行を決めた。準備は？　ＯＫ！
　１、２、３……
　カウントをして、二人同時にギターをかき鳴らした。

　開始一分も経たず、南田にダメ出しされた。
「コード違ってる！」
「拍取れてない！」
「っていうか、ギター弾けてない！」
　ひどい言われようだが、十分もやっていたら段々と形になってきて、楽しくなってきた。南田も小さく体でリズムを取り、必死にギターをかき鳴らす。
　三十分ほどやって、どちらともなく手を止めた。わずかな余韻と共に、防音室は静かになった。
「あのさ」
　自分の手の中にあるギターピックを見つめたまま、南田に声をかける。
「……辞めるとかいうなよ、サークル」
「どうかな」
　顔を上げると、肩からギターを下げた南田は笑んでいた。どうしてこうやって、いつも笑ってられるんだ。
「突っ込んでくれる奴がいないと、寂しくなるだろ」

　南田はゆっくりと腕を上げ、そして勢いよくピックを振りおろした。無茶苦茶なコードが、狭いスタジオの中に鳴り響いた。

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

投稿時刻　：　2013.07.20 23:30
総文字数　：　1670 字
獲得☆ 4.154

《入賞作品》

袋と恋と拳銃について

太友　豪

「――党に清き一票を！」
　ユンナは目に入ってきた他人の汗に顔をしかめながら、アパートの近くをとおる街宣車のがなり立てるスピーチを聞いていた――

　通りに面していない彼女のアパートにまで様々な政党の様々な候補者の名が聞こえてくる。
　彼女は投票というものがよくわからない。彼女はこれまで生きてきた中で投票権というものをもっていなかったし、そもそも人間として扱われてこなかった。
　彼女が言葉を習得したのは、ほんの五年前のことだ。彼女はかつて、ヴィセラバッグシリーズという名で取引される商品の一つに過ぎなかった。

　ハナブサと名乗る男は、闇市場の放出された彼女を買い上げ、ユンナという名を与え教育した。
　ある用途のために遺伝子からデザインされた彼女は健康で従順で、知能的には幼稚園児程度で止まっていた。
　幼稚園児程度の知能、というのはヴィセラバッグシリーズとしては賢すぎる、ということだ。賢すぎた彼女は、失敗作として民間に払い下げられた。賢すぎればヴィセラバッグシリーズは人間なのではないかという疑念が生まれ、人類の幸福に寄与するという彼女たちの存在理由を揺るがしかねない。
　ヴィセラバッグシリーズの仕様には、幼形成熟（ネオテニー）も含まれている。外側が若々しいというのも、彼女らの商品価値を高める要因の一つなのだ。
　知能をあえて成長させないという仕様と矛盾があるようにも思えるが、実際のデータとしてネオテニー仕様のヴィセラバッグシリーズの発売によって、旧式の実年齢通りに加齢するヴィセラバッグシリーズは市場からあっという間に淘汰された。

　ヴィセラバッグとしては天才的な知能を持つユンナにハナブサは言葉を教え込んだ。
　ハナブサはユンナのように特別な才能を持つ子供たちを教育しているのだといっていた。ユンナはハナブサが育てているといったほかの子供たちとはあったことがない。
　言葉を知るほどに、ユンナの世界は広がった。

「はあっ――はあっ――気持ちいいかい、お嬢ちゃん」
　ユンナは仰向けにされた自分の上で腰を振っている中年男の汗みずくの顔を見上げる。
　ヴィセラバッグである彼女は人間に備わった機能はすべて備わっている。
　ハナブサがやってきたと思って無警戒にドアを開けたところを、突然に殴られ茶色く変色した畳の上に組み敷かれた。
　彼女は自分がされていることがセックスというものだということを理解している。しかし、彼女にとってのセックスは快感を伴うものであるはずなのに、膣に強引につけられた傷による痛みと由来不明の嫌悪感があるばかりだ。その齟齬が、ユンナをひどく混乱させる。
　ハナブサは決して間違わない男だった。その彼が教えてくれたことが間違っているはずがない。

　やはり、自分は壊れているのだろうか。
　自分を大切な娘だと呼んでくれたハナブサを思って、ユンナは苦痛を覚えた。ただ一人、愛情を感じる男を思い浮かべて感じるこの苦痛の名をユンナは知らない。

　ユンナは突き上げられ、内臓を揺すぶられるような苦痛の中で、ハナブサのいった言葉を思い出す。「どうしても、苦しくなったら、この言葉を頭の中で三回唱えるといい……ただし、一度しか使えないおまじないだ」
　ユンナはハナブサに教えてもらったおまじないを三度心の中で唱える。
　それだけで胸の中に暖かい火が熾ったかのようだった。
　その火は次第に大きくなって内臓袋（ヴィセラバッグ）を内側から弾けさせた。
　ユンナであったものから噴き出した汚れのない内臓と血液は男の汗まみれの身体にあたって、床の上にバウンドした。
　湯気を上げる臓物たちは、体外に放出されても全く生気を失っていない。
　移植用臓器育成装置、通称内臓袋の最後の仕事は、内臓を損壊させることなく、内臓を外部に露出させることだ。

「我が党は国民の利益のために、移植用臓器育成装置の増産を進め、国民全員が健康な臓器を虜土セル社会の実現を目指します！」
　遠くの通りから街宣車のスピーチが聞こえてくる。
　幼女型の移植用臓器育成装置の額に打ち込まれた二発分の銃声と、中年男の細く長い悲鳴は、かまびすしいスピーチに紛れて誰の耳にも届かなかった。

投稿時刻　：　2013.07.20 23:23
総文字数　：　1728 字
獲得☆ 4.077

《入賞作品》

ヤスマイルの物語

長介

もはやその時代の言語を読み解く者すらいない、遠い昔の、ある国の話だ。
かの救世主の生まれた土地から、少しばかり東に行ったあたりに、ほぼ荒地でできた小さな国があった。
国の名を、ヤスマイルという。
とある中国の学者が唱えるところによると、人類史上はじめて、投票によって政を決めた国であるらしい。

ヤスマイルのおもな産業は、岩塩の精錬であった。
人々は塩を国外に売って暮らしたが、なお、売り切れないほどの塩が残った。
そこで王は塩を貯蔵するため、塔を建て、そこに塩を詰め込んだ。
ヤスマイルの岩塩には、かすかな芳香があり、塔の中に入り、その香りを嗅ぐと、誰もが頭が冴え、世界の真実を知ったという。
世界は、全て、塩でできている。
ひんやりした塩の壁に囲まれ、壁をそっと擦って指を舐めると、誰もが、わずかな甘さと、頭のてっぺんまでつきぬける塩辛さ、そしてごくかすかな、艶めかしい香りに酔い、そう思うのだという。
あるいは、ヤスマイルの岩塩とは、何かしらの禁断の成分を含んでいたのかもしれない。
ヤスマイルが塩によって冨を作り、都に豪奢な宮殿が建ち、砂漠と美女を歌う詩が流行を極めていた時、その政党は現れた。
サ＝リマス党、という。名前は、塩に帰れ、という意味で、中心にいたのは、マスフラという学者だった。
党員たちは、塩の家を作り、塩の他に何も口にしない断食の修行をした。
そして、ヤスマイルは外国からの文物を捨て、塩に帰るべきだ、と主張した。

結党の一年後、マスフラは、王にひとつの布告を出すよう求めた。
もちろん、世界は塩で出来ている、という布告である。それをヤスマイルの教義とすることが、マスフラの生涯の夢だった。
王は拒んだ。のみならず、マスフラと対立する学者、ガクナルを支持してみせた。
ガクナルは商学者で、貨幣の導入を強く主張していた。ガクナルが試作した貨幣は、小石を加工したものであった。

マスフラは、王がガクナルを選んだことに憤激し、毎日、朝と夕に宮殿を訪れ、王との面会を求め続けた。
数年後、さすがに辟易した王は、こう提案する。
国の民に決めてもらおう、と。
マスフラのサ＝リマス党を支持する者は、塩の塊を持参する。
ガクナルのト＝ネニス党（世界は多彩なり、という意味である）を支持する者は、小石を持参する。
それを塔の形に積み、高いほうを勝ちとする、と。

こうして、史上初の国政選挙が行われた。
サ＝リマス党に清き一票を、と書かれた史上初のポスターも作られ、いまは大英博物館に所蔵されている。
結果は、ガクナルのト＝ネニス党の勝利であった。
それでも、サ＝リマス党は再選挙を執拗に求め、毎年のように、投票は繰り返された。
人々は、それが何をめぐる選挙なのか、またたくまに忘れていった。
あるのは、ただ、２つの党の終わりなき争いだった。

ト＝ネニス党は、百回以上勝ち続けた。なぜなら、彼らの導入した貨幣制度は、もはやヤスマイルに欠かせないものだったからだ。
ヤスマイルの芳香ある塩は、もはやたいした生産もされず、時代に取り残された産業となった。
サ＝リマス党の党員は減り、最後は三人しか残らなかった。
が、度重なる選挙の結果、ヤスマイルじゅうに、ト＝ネニス党の石の塔ばかりが立ち並ぶことになった。
この醜い石の塔が、あるとき、国民の憤激を買った。あまりにも邪魔で、醜く、役立たずだと。
だが、勝利に慣れたト＝ネニス党は、石塔の撤去を断固拒んだ。
そして、百二十一回目の選挙で、史上始めて、サ＝リマス党は勝利した。国民はみな、あのひんやりした塩の塔と、甘い芳香を、思い出したのだ。
王は、複雑な面持ちで、民の前に立ち、こう宣言した。
世界は、全て塩でできていて、それ以外は幻である、と。

その瞬間、ヤスマイルは全て塩と化し、国じゅうのありとあらゆる塔は崩れ、人もまた、塩となって地面にばらまかれた。
数日後、塩は砂漠中に舞い、風に乗って世界中に散らばっていったが、ヤスマイルの存在も、記憶も、もはやその塩の中には何ひとつ残らなかった。
だから、ヤスマイルの事実を、さも知っているかのように書いている私も、実のところ、塩でできた幻である。
その証拠に、私の口の中では、生まれてこのかた、その塩の、たまらなく塩辛い味がし続けているのだ。

投稿時刻　：　2013.07.20 23:43
総文字数　：　1763 字
獲得☆ 3.769

《入賞作品》

いいなずけたち

豆ヒヨコ

「あの定規はないんじゃないかな」
　ケントは大きく息をつき、そう進言した。
「定規？　なに？」
　まったく見当がつかないという表情のまま、リエはブロック塀から飛び降りる。
「楽典のとき。定規忘れて、ノートの裏表紙を切り取って代用したろ」
　二人が通うピアノ教室では、演奏のレッスン後、楽典を教わる時間が設けられている。音符や小説線をノートに書きとる機会が多く定規は必須なのだが、リエは今日も入れ忘れてきたらしい。
「ああー！　そうそう、そうなんだよ。まっすぐ作れていたと思わない？　直前に気づいてさ、とっさに鋏で切ってみたの。ナイスアイディア～」
「鋏は持ってきてるのに定規はないってどういうことなんだ」
「工作グッズは持ってたけど、筆箱そのものを忘れたんだよね」
　堂々と言い、リエはにっこりした。鉛筆は？　消しゴムは？　ケントはそう聞きかけて、彼女がポケットに多機能ボールペンを忍ばせていることを思い出す。昨年の冬頃、急に探偵になりたいなどとほざき、何でもかんでもメモを取りまくっていた名残だ。備えあれば患いなし。濡れぬ先の傘。不手際にも全くめげないリエを、ケントは半ば尊敬するような気持ちで見つめた。
　街は熱風と熱気で、存分に蒸されていた。ケントとリエは大きなスクランブル交差点を渡り、住宅地に向かうバス停へ歩く。
　明日は選挙の日で、ちょっとした空きスペースにも候補者が立ち、流れる汗も気にせず声を張り上げていた。
「ありがとうございます！　ありがとうございます！　自由民主党に、清き一票を！　はい、応援ありがとうございます！」
　歩道の左側を街宣車が通り、ケントはとっさに指を耳へつっこんだ。大きな音は幼いころから苦手だ。
「どうして煩くするんだろう。こんなこと、意味あると思う？」
　自分のひ弱さにもうんざりしながら、ケントはリエに聞いた。
「もうさ、聞き流しちゃって全然耳に入らないよね。だから、やってもやんなくても同じって感じ」
　あっけらかんとリエは言った。

「え！？　そんなことあり得るの!？　俺、鼓膜がジンジンして最近は夜も寝つけないんだけど」
　ケントは茫然とする。
「うーん、大丈夫よ。聞いてないもん、あたし。夜眠れないの？　じゃ、うちに遊びに来ればいいのに。泊まってってもいいよ」
　ひまわりのような笑顔で、リエはケントの肩をたたいた。泊まっていく？　ケントは再び茫然とする。確かに彼女とは同じマンションの別部屋だが、そんなに簡単に招きあったりしていいものなんだろうか。誰かに見られたらどうするのだろう。母親たちは動転しないだろうか。ただでさえ、クラスの奴らには冷やかされたり噂されたりで面倒なことになっているのに。
　何より、ケントはリエが好きで仕方がないのに。

　住宅街でバスを降りて目の前に、幼いころから通い慣れた鯛焼きがある。
「やっりー、カスタードのが焼きたてじゃん」
　リエは、これ以上の喜びはないといった風情で店に駆け込んだ。ガラスのショーケースに、焼きあがった鯛焼きが中身の種類ごとに並べられている。焼いたばかりのものには、『アツアツだよ！』のマークがつけられているのだ。
　ケントはこしあんをひとつ買い、リエはカスタードといちごジャムを各ふたつずつ購入した。店の前に並べられた簡単なベンチで、それぞれ取り出して頬張る。
　リエはちんまり小さくて、でもエネルギーにあふれていて、驚くほど大らかだ。ケントのほうが 15cm も背が高いのに、ずっと世界を斜めに見、恐れながら暮らしている。生まれながらのものなのか、育った過程で身についてしまったものなのかは分からない。ただひとつ言えるのは、一生リエと居たいということだった。そう思うだけで、力強く生きていけると思った。
「ねえ」
　赤い舌をちろりと出しながら、ん？とリエは答えた。
「いつか結婚、するよな？」
　これまで何度も確認したせりふを繰り返す。何回も聞く、ということ自体が悲しいということを、11 歳ながらケントはもう熟知している。
「ああ」
　リエはまた、軽やかに笑った。
「もう、心配しないで。するって言ってるじゃん。しないときでも、ずっと友達だって約束したじゃん」
　遠くで街宣車の響きが聞こえた。ありがとうございます。ありがとうございます。一票を、清き一票を。
　そっかと微笑み、ケントは鯛焼きを指でちぎる。三口目のこしあんは、皮がふやけてぼんやりした味だった。

投稿時刻　：　2013.07.20 23:15
総文字数　：　1772 字
獲得☆ 3.750

足音の存在証明

茶屋

現実とは何か。
夢とは何か。
悲劇とは何か。
あるいは草の海原で眠る羊の
あるいは濃密な空気で泳ぐ魚の
あるいは金貨を貪る虫達の

夢想家は現実の辛さに耐え切れず
リアリストは理想の重さに耐え切れない。
見ているものが違うのだと、あるものは諦め
戦うことに疲れたものは、他者の夢を呪う。

そんな現実の中を、僕は生きている。友人たちは既に諦めてしまったこの世界で、僕は生きている。

足音が響く。
こつ
　こつ
　　こつ
　　こつ
　　歩くタイミングに合わせて。
　　こつ
　　こつ
　こつ
こつ
自分の足音とは思えぬほど、明確に、しっかりと、響く。
自分が確かに存在していることを確かめるように、耳に刻んでいく。
ただ、自分の意志で歩いているのだけれども、何だか自分の意志に反して足が動いているような気がす

る。
　立ち止まってみようか。
　ふとそう思ったが、そんなことは出来なかった。
　怪しげな行動は出来ない。僕は支配されていない数少ない人間でなのだから、気取られてはいけないのだ。
　監視されているかもしれないという恐怖は絶えずつきまとっているし、その危険性は常に存在する。
　だから、足音が自分のものであることにも本当は自身が持てない。
　プロならば、もしくは足音をさせず追跡してくるかもしれない。だから僕は人混みと人気のない路地を交互に通って行く。
　絶対に安全というわけではないが、今までこうすることで危険を回避してきたのだ。
　「カルタヘナ・デ・インディアス党に清き一票を」
　選挙カーが横を通り過ぎていく。
　まがい物だ。
　本当は選挙なんて存在していないのだ。もちろん選挙というシステムは存在しているし、投票も数え上げられるだろう。けれどもそれは政府やメディアに操られた結果なのだ。政府は既に結果を知っている。その結果に達するように国民たちを仕向けるのだから。要は茶番なのだ。
　だが、だれもそれに気づかないふりをしている。
　そりゃそうだ。
　政府になんて勝てっこない。
　歯向かった人間は皆、なかったコトにされる。皆の記憶から消され、記録も残らない。
　そう、皆消えていった。
　エルナンドも、カミーロも、エドゥアルドだってそうだ。
　皆、消えてしまったんだ。
　ガブリエルが消えた晩の事は今でも鮮明に思い出すことができる。僕は行きつけの飲み屋で、一人で琥珀酒を煽っていた。時刻は九時。いつもならガブリエルが陽気な歌声でカウンターにつき、ビールを煽りだすのだが。不思議に思って、僕はマスターにガブリエルは今日は来ないのかな、と聞いた。けど、マスターはこう答えたんだ。

「ガブリエルって誰だい？」

　その時、僕は全てを悟った。
　ガブリエルは消されたんだって。
　そうして、幾人もが僕の目の前から姿を消していった。
　人を消し、記憶も記録も消すほどの力を持っているのが政府のどこの組織なのか、僕は知らない。
　僕は、孤独なのだ。ある意味では孤独だからこそ消されずに生きていられるのだ。
　多分、反政府組織のようなものもこの世には存在するのだろうと思う。
　入ろうかと思案したこともある。
　けれど、思ったのだ。そんな組織の存在を、政府が見逃すはずがないと。
　罠なんだ。
　おそらく反政府組織は政府が作ったものだろう。僕のように政府に疑問を抱く人間をおびき寄せるための。

　そんな罠におびき寄せられるものか。
　だから僕は人との接触を避け、どこにも属さず、怪しまれぬように生きていく。
　生き残るために。

　生きていく。

　これからも、ずっと。

　この、現実という世界で。

　例え、僕だけにしか見えなくなっても。

　考え事をしていたから、前から走ってくる子供に気が付かなかった。
　ぶつかって初めてその存在に気付いた。
　ふと、振り返ると男の子は申し訳なさそうに僕を見上げていたので、大丈夫だよというように笑顔で答えた。
　子どもたちは純真だ。
　政府の洗脳もこの子たちにまでは及んでいないだろう。
　男の子は笑顔を返してきた。
　そして手を突き出してきた。何か、白いものが握られている。
「消しゴム！」
　そう、大きな声で言った。屈託のない笑顔で、思わずつられて笑ってしまう。
　けれど、その笑顔も長くは続かなかった。
　僕の右腕は、忽然と消えていたからだ。
　ない。
　ない。
　何度見ても、何度触れてみても、そこには何もない空間だけがある。
　はっとして、男の子のほうを見やる。
「なんでも消せるんだよ！」
　男の子は自慢げに言った。
　僕の顔は恐怖に歪む。
　嫌だ。
　嫌だ。
　こんなところで僕は消えるわけにはいかな

投稿時刻　：　2013.07.20 23:23
最終更新　：　2013.07.20 23:36
総文字数　：　1351 字
獲得☆ 3.667

ヨダレと投票券

雨森

　最近の表の世界ではとかく街頭をがなり散らして回る白い生き物が目立っていた。
　一度あいつをぶっ殺して、あれに食われたニンゲンども助けてやろうかとも思ったが、ニンゲンの目に晒されるのはどうも気がとがめる。俺はニンゲンの平和が好きだ。やいのやいのと騒がれるのも厄介だ。
　しかし、最近はとくにひどいのだ。へんてこな四本足どもはどこの道も我が物顔で往来するが、特にあの白くて背の高い奴は例外に目立つ。なんでもここら一帯のニンゲンの言葉で、
『〇〇党に清き一票をお願いいたします！』
　――などとニンゲンを咥えて叫ばせているが、俺から見れば噴飯物というやつだ。どうやってあの白くてうるさくて、へんてこな四本足の奴がニンゲンの政治に携えるというのだろうか。
　おっと、甘く見てもらっちゃ困るが俺は何百というニンゲンどもがコッカイギジドーと呼ばれる巨大なバケモノに食われるのを知っている。だがあの四本足どもがコッカイギジドーの餌食になったなんて話は一度も聞いたことがない。さらに言えば、へんてこな四本足の中でもあの白いのはいけない。なんと言っても白くて背が高くて目立つし、他の四本足と違って四つ角で止まってがなりたてる。それが類のないほどにうるさい。コッカイギジドーだってあのうるささには食欲をなくすに疑いない。それに味だってニンゲンの方がいくらかましだろう。
　しかし、ニンゲンどもはどうしていつまでも、あんな四本足どもを我が物顔でのさばらせているのだろう。俺などは、ニンゲンどもに温厚を通り越して危機感まで感じる。四本足の犠牲者はほんのちょっとらしいが仲間を食われながらのうのうと素通りできる神経が俺にはさっぱりと理解できない。もし俺の兄弟たちがあの白いのに食われたなら俺は絶対に許しはしない筈だ。あのへんてこな体を八つ裂きにして、黒いへんてこな四本足を引きちぎって、ニンゲンたちの往来にさらしてくれる。そう考えると少し気分がよい。さて集合の時間だ。
　あの魯鈍な四本足どもは細い路地までは入れない。その細い路地を俺は走ってゆく。
「おう、ヒゲにょ」
　呼び止められて顧みたら四丁目のシロだった。兄弟たちの中では随分な古参で俺も謙らねばならない、わかりやすくいえばちょっとえらい存在だ。
「シロのオジキ、集まりの具合はどうでふかいや」
　そう聞くとシロは長い髭をもにょもにょとさせ

「そりゃあ言ふに及ばずだへ、ヒゲにょ」
「ちげえねえ」
　俺は耳の下を足で掻いた。裏の世界はニンゲンの世界とはちと違う。コッカイギジドーなどというバケモノに支配されたりはしない辺りがやはり素晴らしい、俺は兄弟たちが誇らしかった。
「シロのオジキ、『投票券』が零れ落ちそうだぜ」
　めざとく俺がそう言ってやるとシロは口をあぐあぐとさせて投票券の噛みごたえを確認した。途端に白の口から涎があふれる。
「すまねえにゃヒゲの」
「これを落としちゃ話にならねえですけね」
　シロにそう言いつつ俺は口の中に入ったツバでベトベトになった投票券を確認した。噛みごたえを確かめているうちにやっぱり涎が溢れてとまらねえ。
「おい、それを食うんじゃねえぞヒゲの。ケンリのホウキだからな」
　おっと、と俺は涎をぐびりと飲み込む。これこそが俺たちの清き一票ってやつだ。俺は口の中のカリカリを甘噛して路地の隅を走りだした。

投稿時刻　：　2013.07.20 23:39
最終更新　：　2013.07.20 23:43
総文字数　：　1743 字
獲得☆ 3.583

酒が不味い

碧

「――党、――党にどうか清き一票を！」
　大通りからうぐいす嬢の声が聞こえてくる。うぐいす嬢なんて言っても、すごく年増な声に聞こえるけれど。
　投票には行かない。誰が議員になったところで世の中変わるなんて思えない。だいたい、今日も明日も投票日も、一日中バイトのシフトが入ってる。時給 658 円で 8 時間。必死に勉強して入った地元の国立大を卒業した挙句、就職活動が上手くいかず今やいい年してワーキングプアーのフリーターだ。選挙の時期になるといつも、かつて同級生だった議員の息子の顔が脳裏を過ぎる。勉強なんてからきしだったくせに、都心の私立大で学位を取って、今は父ちゃんの下でぬくぬく豪勢な生活をしてやがる。あの締りのない笑顔を思い出して急に気分が悪くなった。
　汗をかいている缶チューハイにバーコードリーダーを当てる。
「恐れ入りますが年齢確認ボタンをお願いします」
　事務的な口調でそう言いながら残りの商品にバーコードリーダーを当てる準備をする。客がボタンを押す気配がない。
「俺、20 歳超えてるよ」
　馬鹿か、そんなんはどうでも良いんだよ。速く押せ――
　胸中で悪態をつきながら顔を上げた途端、心臓が止まりそうになった。
「よっ、久しぶりじゃん。お前セブン就職したの？」
　覚えてるんだ、私の顔。
「あの……ボタン……」
「このコンビニよく来るのに知らなかったわ」
　言葉が上手く出ずにいる私の様子に構うことなく、そんなことを軽い口調で言いながら、男はタッチパネルに手を伸ばした。
　つまみにするんだろう。イカゲソと野菜スティックがかごに放り込まれてる。相変わらず、酒がすきなんだなあと思った。
「1250 円になります」
「いつからここいんの？　お前確かＮ大の院行ってたんだよな？」

　矢継ぎ早に質問してくる男と目を合わせることが出来ない。おつりを数える手が震えた。
「あの！」
　思いのほか不自然に大きな声になって、男が目を丸くしていた。動悸がする。
「後ろ……お客様……待ってる……んで……」
「え、あ、すまんすまん。仕事中に悪かったな。また来るわ、頑張れよ！」
　そう言って酒とつまみの入った袋を持って男は立ち去る。なんで、って思った。なんで、私の顔を覚えてるの。なんで私の顔を覚えてるなら、あんな普通に話しかけるの。

　何党とかどういう政策とか、そういうのは忘れたけど、とにかく彼は、政治家の息子だ。
　最後に会ったのは 20 歳の時の高校の同窓会だった。
　私は甘党で、酒が飲めなかった。彼は辛党で、お酒が好きだった。
　社交的で誰にでも話しかけるタイプだった。私のことなんて覚えてるはずないと思ってたのに、ちゃんと顔と名前を覚えていて、ビール瓶を持って私の隣に座った。将来自分も政治家になるから、顔を売っておかないと、と冗談めかして言っていた。笑ってあげるべき冗談だったんだろうが、私はむっつりしたままだった。それに対して彼が気分を害した様子はなかった。
「まあ、飲んで飲んで」
　とビール瓶を傾けられた。衝動的にコップを差し出しそうになって、すんでのところで止めた。
「飲めないの」
　と言った。
「良いじゃん、少しぐらい。大丈夫大丈夫」
　何度かその応酬があって、私は少しだけビールを飲んだ。まずいと思ったのは最初の数口で、すぐに酔っ払って味も何もわからなくなった。ひとたび飲んだらぐいぐい飲むようになった私に気をよくして、彼はどんどん酒を進めてきた。
「なんだ、結構飲めるんじゃん」
「だって、嬉しいから」
「え？」
「話してくれたの、嬉しかったから」
　今思えばその時点で彼は相当戸惑っていたから、そこで我に返るべきだったけど、だめだった。
「ずっと好きだったの」
　彼が困ったように表情を失ってうろたえているのを見て、急激に酔いがさめた。場を白けさせてしまった。飲みの場で言うようなことじゃなかった。重すぎた。

　自動ドアが開いて、チャイムの音が店内に鳴り響いた。横目で見ると、可愛らしいワンピースを来た茶髪の小柄な女の子が、笑顔で彼を待っている。それから二人で手を繋いで歩き出した。今買ったお酒を二人で飲むんだろう。辛党同士で、美味しく。
「ーー党、ーー党にどうか清き一票を！」
　先ほどとは違う政党の選挙カーが騒音を撒き散らしていた。私はそれに重ねるように、心の中で呟く。
　どうか、甘党に清き一票を。

投稿時刻　：　2013.07.20 23:45
総文字数　：　1169 字
獲得☆ 3.538

宇宙的恐怖を克服するために

工藤伸一@ワサラー団

宇宙が恐くなったのは、いつからだろう。子供の頃は宇宙への感心が高く、児童向け百科事典の宇宙に関する巻を何度も読み返していた。当時は自分の知っている世界が狭すぎて、宇宙と地球と日本列島を隔てる垣根がなかったから、おそらくそのせいで宇宙だけを特別視することがなかったんだろうと思う。けれども大人になって以降は、自分の住む国や海外の地理や歴史を熟知するようになり、外宇宙だけが人智の及ばぬ理解不能な空間として残されることとなった。

もちろん地球に関する知識にも曖昧な点は数え切れないほどあって、それは今後も大きく減ることはないだろう。とはいえ人類の住む場所は有限であり、ジャングルや深海などといった人の暮らせない領域についても、今や大抵のことは想像できる。そういう意味では地球を含む太陽系など、宇宙の中でも身近な地点のことは分かっているため、さほど恐くはないとも言える。問題なのはそれらの星を擁する銀河系も有限なものであり、その外側には無限の何かが広がっているという、どうにも理解しがたい事実だ。すなわち宇宙的恐怖とは無限への畏怖に他ならない。

ビッグバンによって我々の住む宇宙そして地球が生まれた。その外側には別の宇宙が存在しているらしいことも何となく分かる。ところがどこまで考えを巡らしてみても、外側の更に外側にも何かが存在していることとなり、無限という概念を否定することはできない。そしてその無限は空間のみならず時間の流れにも共通している。いや、難しい話はここまでにしておこう。どうせ僕には分かりやしないのだから。

もっと具体的に考えてみると、高校の時は天文部員だったから、宇宙に恐怖を感じることはなかった。そうするとそれ以降に何かあったのだ。何があったのか突き詰めてみたいところだが、どうにも記憶がはっきりしない。2 ちゃんねるに「宇宙こわい」というスレッドが立ち、1 レス目に「超ひろい」と書かれていたことがある。稚拙なようでいて真理を突いているという点で、今やもう伝説的な書き込みといっていいだろう。それを読んだから恐くなった可能性もなくはない。

「超ひろい」つまり「無限」なのだ。けれども自分の命が有限であることもまた恐いので、何だか矛盾している。無限も有限も等しく恐いなんてことがあるだろうか。さておきこの文章を投稿するための時間も有限なので、何とかしなくてはならない。明日の選挙でどこかの政党に清き一票を投じるために必要な時間

も、もちろん有限だ。もし投票期間も無限だったなら、政治は立ちゆかなくなる。けれども時間は無限なのだから、結局のところ政治は無限に続くようにも思われる。地球に残された時間は有限だけれど、時が尽きる頃には他の星にでも移住していることだろう。そこまで考えて投票したいものだが、それは余りにも難しすぎる。終わりだ。（了）

投稿時刻　：　2013.07.20 23:26
総文字数　：　1691 字
獲得☆ 3.538

おやつ考

住谷　ねこ

休日の 2 時か 3 時
もしもでかけてたりしたら
帰ってきてから

それが　たとえ　もう夕飯よ
てな時間であっても

「おやつ」にしようか。

というのが
我が家の
誰というのでもなく

みんなの口癖だ。

うちの家族は

おばあちゃん　しみ　76 才
とーさん　真琴　　52 才
かーちゃん　美香子　50 才　対外的には 47 才
違いがあるのか？といつも疑問。

俺　駿太　25 才　フリーター

妹　桂　19 才　学生

という構成だ。

おばあちゃんはプリンとかゼリーとか
ババロアとか歯ごたえのない　ヌルんとしたものが好きだ。
だからって歯が悪いわけじゃない。
靴底のように固い
心配になるほど安い焼肉食べ放題の牛を
うまいうまいと　なんなく食いちぎるほど
丈夫だ。

とーさんは「おやつ」という単語が似合わない。
まあ　歳相応にたるんだり
うすくなったり
多少はしてきたものの
どちらかといえば
まだまだ　いけるっ　なにがいけるんだかわからないけど
とにかく　そういう外見をしながら
実は　我が家で一番おやつにこだわり
一番おやつを欲しがり
おやつにありつけないとか
おいしくなかったとか
根に持つタイプで
その好みは一貫しているようでしていない。
ヌルン系も好きだし
ふわふわ系も好きだし
歯ごたえのあるものも好きだ。
キンキンに冷やしたチョコレートなんて大好きだ。
洋物も和物も分け隔てしない。

いもうとの桂。
こいつは女のわりには
どこそこのパンケーキだの
どこそこのモンブランだの
クレープがとうしたとか
どこそこのデザートはうまいとか
コンビニの　自分にご褒美みたいな
ちょっと贅沢スイーツなんてのも興味ないらしく

俺の彼女はコンビニスイーツ命で
今日はがんばったから帰りにどこそこのなになにを買うんだっ
とか騒いでいて　なんだ？それ？　と聞けば
えーーーっ知らないのー？

流行ってるのにー
新製品なのにー
と　あの極上スイーツを知らない奴が
この世にいるなんて信じられない
それが　自分の付き合っている男だなんて
恥ずかしい
情けないっ　と嘆くほど有名らしいので

「今、ファミマのなになにがうまいんだって？」
と　聞いてみれば　「？？？？？」な反応をするようなやつで

まあ　だからって食べないわけではなく
出されれば何でも文句も言わずに食べる。

まあそんなうちだから
とにかく昼飯と夕飯のあいだには
必ずおやつがなくてはならないのだ。

会社だ学校だ　お出かけだのときは
それぞれどうしているかしらないが
たぶんみんなそれぞれ何かしら
食べているだろうと思われる。

今日は休日で、珍しく家族５人だれも外出予定がなく
ちょうど隣の駅に新しいイタリアンレストランが出来て
ランチバイキングを始めたというので
なかなかそんな機会もないからと食べに出た。

そして帰り道。
バイキングだから値段負けしないようにと
普通よりばかばかと食べて
もう水も入りないというほど食べて
腹ごなしに一駅くらい歩いて帰ろうと
のろのろと心なしか腹を突き出し
何気に偉そうな感じの帰路。

「ねえ　おやつ買っていこうよ」

俺は吐きそうになった。
今　死ぬほど食ったのに
もう　おやつの心配かよ？

しかも　バイキングだ
しょぼいとはいえデザート類も
数種類合って
味見味見とほぼ全部食べたのに……

おやつ。

なのに

「じゃあ　あそこの　ほれ和風ドーナツ屋ができたでしょう？
　あれがいいな。　おばあちゃん　抹茶ね」
ば……ばあちゃんっ

「私はシュテルンのケーキがいいな
　最近たべてないし」
か……かかかか　かーちゃんっ

「おかあさんとおばあちゃんでじゃんけんでもすれば？
　私はどっちでもいいし。ドーナツならプレーン
　シュテルンならフルーツタルトでいいや」
おおおおお　おまえええええっ

とーさん。
とーさん止めてくれ。
さすがに　今日はもういいだろうって言ってくれっ

「どっちも買えばいいだろう
　桂　ドーナツ買ってきなさい。
　駿　シュテルン行って来なさい」
だあああああああああああっ

っていってなかったけど
俺のことだけども。
俺は実は……
こういううちだから
大きな声では言えない。

言えないけどはっきりいっておやつは好きじゃないっ
つか　こういう環境で最近はほんっと食べたくない。

どうしても食えというならおやつというか
間食は「せんべい」が好きだ。
とくにピーナツ揚が大好物だ。

しょっぱいものが好きなんだ。

ああ　だれか。
誰か。
俺に味方をしてくれ。

辛党に清き一票を……

投稿時刻　：　2013.07.20 23:30
総文字数　：　3081 字
獲得☆ 3.364

《KDP 風立ちぬ杯賞》

きよき鉄槌を振る者は

犬子蓮木

「不正選挙？」
　遠見七季ことナナキが、僕の伝えた言葉を繰り返すように叫んだ。彼女は出窓の下に足を投げ出して座っていて、折りたたみテーブルの上に置いたノート PC とサブディスプレイを眺めていた。
　ここはナナキの家の二階の部屋。僕こと峠楓と吾川風昂、通称フーコーは、担任の先生から受けた相談についてナナキにお願いしに来たのだ。
　僕もフーコーもナナキも同じ高校の同じクラスのはずだけど、ナナキは不登校のひきこもりだったから。
「なんでまたそんな面倒な相談を受けるかなあ、カエデは」ナナキが呆れたように言う。「どうせ、私を学校に関わらせようとかでそういうこと頼んでるだけでしょ、あの住めば都先生が」
「普通の宮古先生ね」
　僕は凡人で、フーコーは空手部副主将の秀才、そしてナナキは天才と言えばわかるようなおかしな人。僕ら三人は幼なじみで、家から滅多にでないナナキのために、よく彼女の部屋に集まっている。そんな話をしたから、宮古先生も担任としてナナキを学校に呼び寄せるために、こんな話をしてきたのだろう。
　フーコーはずっと黙って部屋の端に座っている。彼は無口で、ほとんど話さない。根暗というよりは外界に興味がないタイプだと思う。
「めんどくさいなあ」
　ナナキが言った。耳にイヤフォンを刺していて、コードが揺れている。だけどそこに音楽は何も流れていない。先には古いカセットレコーダがつながっていてテープもカセットも入っていないのだから鳴るはずがないのだ。そしてそんなことを学校に通ってたころから授業中でも続けていたのだからたちが悪い。
　これで勉強ができなかったりすればよかったのだけど、できすぎる天才少女であったからこそなおのこと。
「話は聞くよ、カエデの頼みだから」
「ありがとう」
「解決したらチューしてくれる？」
「世界の紛争を全部解決したらしてあげる」
「ちぇっ」
　ナナキは僕のことが好きだとこの前の春休みに告白してきた。僕は友達としてなら好きだけどと断った。

そうしたら、ナナキは不登校になった。それが二ヶ月前のこと。ナナキに言わせれば、僕といちゃつけないスクールライフなんて考えられないということらしい。
　だから僕とナナキとフーコーは、今までと変わらず、三人で遊んでいる。口にはしないけど、エターナル・トライアングルという奴だ。
「説明するね」
　僕は少しだけフーコーの方を見る。僕とナナキのほうを見ていたけど焦点はあっていない。何を考えているのだろう。それが知りたいと思う反面怖い。
「えっと……」
　僕は学校の生徒会選挙であった、一部の事件について話はじめた。
　ことの発端は、ある候補者の陣営が、ガムを配ったことだった。紹介文のビラに合わせて、薄っぺらいガムをひとつ配っていたのだ。それだけならすぐに怒られて終わることだと思う。だけどそれだけではなかったのだ。
　候補者は三人いて、そしてどの陣営もが不正を働いていたという。無論、学校の生徒会選挙にそこまで明確なルールなんてないから、倫理的にどうなのか、という問題になる。
　ある綺麗な女性候補者は彼女の水着写真をばらまいた。
「それで、カエデは興奮したのその写真？　エッチ！」ナナキが言葉をはさんだ。
「僕はたまたま受け取らなかったよ」普通に返す。「フーコーは受け取ってたけど、ね？」
　フーコーは不思議そうな顔をしている。たぶん、受け取ったことを忘れているのかもしれない。
「フーコーはどうでもいいよ。カエデはどうなの？　私の水着写真とかいる？」
「いらない」
　ナナキがなんで僕みたいな凡人に拘るのかはわからない。僕がこの二人の家の近くに引っ越して来る前は、フーコーとナナキが美男美女のお似合いのカップルだと言われていたらしい。まだまだずっと小さかったころのことだけど。
　僕はそこに入り込んできたよくわからない凡人なのだ。頭もよくない。
「話し、つづけるよ」
「どうぞ、あとで写真あげるね」
　僕は無視した。
　フーコーも無視しているけど、これはいつものこと。
　僕はナナキに説明を続ける。もう一人の候補者はどうやら先生を協力者に迎え入れたらしい。そして、それが一番の問題だった。どんな関係なのか、どれほど協力してしまったのか。
　結局、選挙では、その男性教師を協力者とした彼女が当選した。
「それで、それを調べろというの？　ひきもりで不登校の私に」
「うん、調べて欲しいんだ。学校専用の裏 SNS を管理しているナナキに」
　ナナキはさまざまな情報サイトを持っていた。学校のもの町内のもの、僕が知らないものまで、いろいろ持っているだと思う。彼女は天才で、情報の海に溺れるのが趣味だった。わざと溺れて危なくなったら泳ぎ出す不真面目なイルカみたいな存在。
「援交党に清き一票をお願いします」ナナキが天井を仰ぐようにして言った。
「なに、いきなり」僕が言う。
「そういうことでしょ？」
「当選した人が先生とそういう関係だったということ？」
　僕は少しだけしどろもどろに尋ね返す。

「違う」ナナキは微笑んだ。「カエデはかわいいな」
　僕は赤面する。
「どういうことか説明してよ」
「私が言いたいのはどんな答えが望まれているのかということだよ」
　ナナキが話をはじめる。
「当選した女子高生、協力者は大人の男。教師。それだけで、人の頭にストーリーができあがる。カエデはどんなストーリーを作った？」
　僕は黙っている。
「フーコーは興味がないから考えない。でもカエデは考える」
　図星だから何も言えない。
「ごめん、別にカエデをいじめようというわけではないんだ」ナナキが悲しそうな顔を見せた。「普通ならそうするってこと。私だって数十はストーリーを作り上げて思い浮かべるよ一瞬で」
　その数と短い時間は彼女の性能を物語っている。
「ただ、みんなそういう下世話な話が好きだよねということ。非難しているわけじゃない」
　ナナキがテーブルに載っていたパソコンのキーを叩く。
「望まれているような情報はなにもないよ」
「えっ？」
「その当選した彼女は、私がわかる範囲でその教師となんら噂になるようなことはしていない。本当にほのかな恋愛感情的な話しすらもゼロ。これはただ観測できていないだけの可能性ももちろんあるけれど、まったく別の情報もある」
「どういうこと？」僕が尋ねる。
「誰かが流した」
　フーコーが重たい口を開いた。
「そう。なんでこういう良いところだけフーコーは言っちゃうかなあ」
　フーコーは答えない。たぶん大事なところだから、彼の中で話すべきというラインを超えるのでは、と僕は思う。
「この情報には明らかに不自然な流れがある。そしてそれを追っていくと辿り着いたのは……」
「別の候補者？」
「違う。これって彼女の友達って人かな」
　ナナキが名前を読み上げる。知らない人だけど当選した彼女と同じクラスで同じ部活であることは確からしい。
「なんでそんなことを」
「さあね。嫉妬とか寂しさとかいくらでもあるんじゃない？　問い詰めれば何かしらは言うとは思うけど、きっと本当の動機は加害者にもわからない」」
「どうして？」
　ナナキはそれがとても当然のことだと言うように続けた。
「友達だから」
　ナナキの手によって、生徒会不正選挙疑惑は簡単に解明された。事件なんてものにはならず、ミステリィでもない。ただ情報を持っていたものがそれを素早く整理しだけ。
　天才は言った。
　友達だからと。

　それはなんの理屈にもなっておらず、ただ受け入れることしかできない。人間の行動に全て説明を付けるのはたとえ天才でも無理なのだ。
　だからどうしようもなく残留し漂ってしまう。
　なんでそんなことをしてしまうのかという問いが。
　誰にも解明されることが不可能な、
　謎として。

投稿時刻　：　2013.07.20 23:33
総文字数　：　1397 字
獲得☆ 3.333

モググは無慈悲な星の覇王

丁史ウイナ

　モググは票をみんな食っちまう生き物だ。太陽系の外れの、どっか小さな星からつれてきたらしいが、詳しいことは誰も知らねえ。公然の秘密ってやつだ。誰も喋らねえんだ。モググは硬いクチバシを持っている。モググは硬いツメを持っている。モググは人間ぐらいのでかさがある。ってくちゃべってるお喋り好きは、みんなお役所につれてかれたと、もっぱらの噂だ。
　だが、モググは本当に実在している。
　ここだけの話だが、この目で見たことがあるんだよ。あ？　モググのくちばし？　いやぁ言えめえ。お役所行きはごめんだからな。だが、人間くらいでかいっつーのは、そのとおりだったぜ。いやいや、というか、モググは人間そのものだ。
　姿こそ違えど、モググはでぶっちょの人間みたいに動いた。二本足で歩いて、二本の手でビール瓶握りやがって。本当だ。嘘じゃねえ。信じない？　けっ。

　＊

　お喋り好きの権兵衛を、それからからっきし見ていない。おれは住民認証カードを照合させ、投票所に入室した。地球ではすっかり電子投票が主流だというのに、火星ではいまだに直接投票だ。投票所は人間たちでごったがえしている。モニターには、サンライズ党、カリスト党、モア党にジョウント党、ふざけた連中で一杯だ。挙句の果てには、どこの党とも知れぬ輩が、トリフィドのコスプレをして電子情報を垂れ流している。
　おれは不思議と、モググの噂をそのトリフィドから連想した。どう連想したのかわけが分からないが、おれのニューロンが勝手に働いたのだからおれは知らない。モググ。カリスト党もモア党もどこも、モググを雇って相手の票を食わせてるんだってよ。この噂は、権兵衛から聞いた話ではなかったな。
「ただの噂だ……」
　おれは独り言をしてしまったらしい。火星に一人暮らしするようになってからはたまにしてしまう。だがそれは雑音に掻き消されたらしい。おれが苦笑いをしていると、むしろその表情のほうが目立ったようだった。

　＊＊＊

「タバスコが一番デスネ！」
「あなたは馬鹿デスカ？　はちみつこそが一番デス」
「甘ったらしい票のなにがいいのデスカ！」
「辛い票のなにがいいデスカ」
　あそこで言い争っている二匹こそ、なにを隠そうモググだ。モググは与えられた空間で、与えられたエサを食していた。それはまさしく、さきほど運ばれてきた紙切れ、いや票だ。監視カメラに映る彼らは、とりあえず順調に票数を減らしているようである。
「うーむむ！　怒ったデスヨ」
「なにを！　こちらも怒るデス」
「わたしは辛党を設立する！」
「むむむ！　ならば甘党を作りマショウ！」
　いや、急に彼らが暴れだした。監視カメラを眺めていた男は、飛び上がって制止しようとなだめるが、モググは怒り心頭で聞く耳を持たなかった。そもそもモググに耳はなかった。

　＊

　騒ぎ声が聞こえる。列の前のほうからだ。おれは背伸びをして向こうを確認しようとした。その次の瞬間には、背伸びをする必要がなかったということに気付いた。クチバシを持っていて、長いツメを持っていて、まるでモグラかなにかが巨大化したような生き物が二匹、拡声器を手にしている。
「人間の投票は終わりデス！」
「ミナサマ！　甘党に清き一票を！」
「いや！　辛党に――」
　なんなんだこれは。
　おれは住民認証カードを取り落とした。それはいつの間にか、あのバケモノの手に移っていた。それにやつらは、奪い合うようにタバスコとはちみつをかけている。
　食えればなんでもいいらしい。

投稿時刻　：　2013.07.20 23:39
総文字数　：　885 字
獲得☆ 3.083

小説はひとつの鏡である

Wheelie

今日は朝から OS の再インストールをしていた。以前と同じ OS 即ち Windows7 であるはずなのだが、以前は入っていなかったアクセサリに気付く。もしくは以前から入っていたのかも知れない。なんてことのない只の付箋アプリケーションである。そんなわけで私は今、付箋アプリケーションでこの原稿を書いている。

OS を再インストールしたので、Twitter のアカウント名を思い出せずにログイン出来なかった。パスワードでは無くアカウント名、所謂自分の呼び名である。自分の名が思い出せない。日常的にあまり無い出来事である。私は私になってまだ日が浅い。だから自身の名前のスペルを記憶していない。私の人間性は定まっていない。思考は漂っている。只文章を生成するだけの何者かになろうとしている。物語の無い文字列を生成するための容れ物として。

書くための材料を飲み込んでいく。インストールされたばかりの真っさらなブラウザを起動し、主題となる単語を検索していく。主題と親しい言葉、反対の言葉、距離の遠そうな言葉を組み合わせていく。そうしてそれらしい文章を創りあげていく。

原稿の一行目に書かれたものは私の言葉ではない。今この時間に幾人かの作家が同様の一文を用いて小説を書いているはずだ。そうして同じ文章から幾つもの異なる物語が生成されていく。

私は付箋アプリケーションの画面を少し広げる。紙を模した黄色い窓は文字で埋まりつつある。このアプリケーションでファイルを保存する方法を私は知らない。迂闊に何らかのキーを叩いて画面を閉じてしまうこともあるかも知れないと思う。それならそれで構わない。

できるだけ純粋な、ただの文字を。

得るものが無いと分かっている小説を、人は読むだろうか。知識も感慨も与えられることの無い文章。私はなるべく自動生成に近くなるようにキーボードを叩いてる。後先を考えずに。与えられた時間を充分に使い、空虚な何かを書き上げる。そうして最後に書き上げた文章をカーソルで選択する。文字列が青く反転する。Delete キーを叩く。殆どの文字列が消失する。

「____党に清き一票を」
　という最初の一行だけを残して。

投稿時刻　：　2013.07.20 22:35
総文字数　：　84 字
獲得☆ 2.714

《最速記録再び更新で賞》

明日は早いからこれ書いたらもう寝ます。

ひやとい

「～党に清き一票を！」
　土曜の朝っぱらから拡声マイクがうるさい。
　ふと枕もとにあった火炎瓶を投げたら外で大騒ぎになってよけいうるさくなった。
　失敗したなあと思った（小並感）。

同じお題を用いた小説、Twitter 小説のご紹介

お題の「____党に清き一票を」を取り入れた Twitter 小説を書いてくださった方がいらしたので、Togetter にまとめページを作成いたしました。ぜひこちらの作品もあわせてお楽しみください。

第 7 回てきすとぽい杯のお題で **Twitter** 小説
http://togetter.com/li/540540

※他にも関連する作品があればリンク追加いたしますので、見かけた方はご連絡くださいませ。

終わりに

第７回てきすとぽい杯は、開催日の７月 20 日が参議院議員選挙の前日だったこともあって、お題を、「＿＿党に清き一票を」とさせていただきました。やや政治色のあるこのお題、苦手・書きづらい、という方と、楽だった、という方とに二極化してしまった印象がありましたが、作品をご覧になってみてはいかがでしたでしょうか。

お陰様で今回、てきすとぽい杯における最速記録及び最長記録をそれぞれ塗り替える作品に恵まれまして、特に作品の長さにつきましては、わずか１時間 15 分の執筆時間で三千字を超える作品が２つも並ぶという、驚愕の回となりました。
また同時に、ご参加くださった作者さんからも「今回はレベルが高い」「面白い作品ばかり」という声が上がるなど、内容的にも非常に充実した回となったのではないかと、開催した側としても大変ありがたく、喜んでおります。

――最後になりますが、今回も様々に趣向の凝らされた魅力的な作品をお寄せくださった作者の皆さま、また、投票による審査、感想・チャット会にご参加くださったすべての方に、この場をお借りしてお礼申し上げます。

てきすとぽい杯は、今後も毎月中旬の開催予定でおります。
お時間ございましたらまたぜひ、投稿、審査・感想にご参加くださいませ。

2013 年 8 月 10 日
てきすとぽい杯　運営担当

※なお、次回てきすとぽい杯は、2013 年 8 月 17 日 (土) 開催の予定です。

言葉の茂る樹が育つ。

作品集電子書籍を
Pubooにて頒布中。

てきすとぽいは、競作や共作を支援するテキスト創作サイトです。一人ひとりのウェブ作家たちが、競作・共作を通じて結びつき、感想やアドバイス、採点などをかわしながら、よりよい作品を創ることを目指しています。

作家同士が言葉を交わしあい、言葉のやりとりが豊かに茂り広がっていく。そんなサイトにあなたも参加して、一緒に創っていきませんか？

いまはまだ、小さく芽吹いたばかりですが、いつかきっと言葉の大樹になると信じて。

てきすとぽい杯作品集
〈第 7 回〉

http://p.booklog.jp/book/75384

編集まとめ　：　てきすとぽい

http://text-poi.net/

てきすとぽいプロフィール

http://p.booklog.jp/users/textpoi/profile

表紙デザイン　：　蟹川森子

てきすとぽい杯コピー　：　茶屋休石

感想はこちらのコメントへ

http://p.booklog.jp/book/75384

ブクログ本棚へ入れる

http://booklog.jp/item/3/75384

電子書籍プラットフォーム　：　ブクログのパブー

http://p.booklog.jp/

運営会社：株式会社ブクログ

てきすとぽい杯